

## プラスチック汚染との戦い

(原文は英語)

ケイト・イエオ (16 歳)

シンガポール

プラスチックは安くて丈夫なため、素晴らしいものです。

プラスチックは安くて丈夫なため、恐ろしいものです。

実は、プラスチックはあまりにも丈夫なため、分解するのに 1,000 年ほどかかることがあります。

この 10 年間でプラスチックの生産は猛スピードで増加しました。「ミラクル素材」と呼ばれるプラスチックは、人類の歴史の中で最も素晴らしく、広く使われている発明の一つです。安くて軽く、丈夫で作るのが簡単。飲み物のペットボトルからコーヒーのマドラーまで、現代の私たちにとって、使い捨てプラスチック製品は日常生活に欠かせないもので、どこにでもあります。

残念ながら、このことが現代における最大の環境害毒の一つを起こす原因となってしまいました。私たちの土地や海は、現在その被害を受けています。私たちが無知で怠け者だったために、土地や海は廃棄場やプラスチックごみの回収プールとして扱われているのです。また、プラスチックはこれ以外の多くの問題の原因にもなっています。排水路を詰まらせることで、洪水や媒介性感染症の発生率を高めたり、食べ物と間違えて食べてしまった運の悪い海洋生物たちを窒息させたり汚染したり、私たちの食べ物や飲み物に密かに溶け出して私たちの健康を害しています。ほんの少しの便利のためにこれだけのことを犠牲にしているのです。それなのに、これまでに製造されたプラスチックのたった 9% しかリサイクルされていません。このままのペースで続けると、2050 年までに埋立地には 120 億トン以上のプラスチックごみが埋められ、海には魚よりも多くのプラスチックが浮かぶこととなります。プラスチック汚染はもう迫り来る大惨事ではないのです。今まさに起きていて、私たちはこの戦いに勝たなければいけないのです。

問題はプラスチックそのものにあるわけではありません。私たちがそれをどう使うかが問題なのです。ですから、私はこの社会で消費される使い捨てプラスチックの量を減らしていきたいと考えています。

この問題を解決するために欠かせないものは、国民の意識の向上です。シンガポールにおける消費者のプラスチックに対する考え方を換え、廃棄物を最小限に抑える文化を作ることです。だからこそ、飲み物をテイクアウトする時は、再利用できるマイカップまたはマイボトルを持ってこよう消費者に呼びかける「BYO (Bring Your Own) Bottle Singapore (マイボトルを持ってこようシンガポール)」運動を始めることにしたのです。インスタグラムのアカウント (@byobottlesg) のフォロワーは毎日平均 5 人ずつ増えています。少ないと思われるかもしれませんが、これによって毎週海に流さ

れるペットボトルが 20 本減ったかもしれません。それにまだ運動は始まったばかりです。

もちろん、消費者だけがこの問題の原因ではありません。小売業者から業界の代表者や政府まで、その他の全ての利害関係者もこの問題に参加させる必要があります。そこで、50 社を超える食品・飲料業界の企業に向けて、BYO 運動の支援、当然のようにストローを配布する方針の変更、またはプラスチックストロー自体の廃止など、大胆かつ重要なリクエストを書いたメールを送りました。16 歳の学生の私にとって、これらの企業に働きかけることは大変な挑戦でしたが、幸いなことに、自分の一途な気持ちは報われました。いくつかの企業が、私の提案を検討または実行してくれると約束してくれたのです。少しの決断と勇気があれば、ここまで現状を変えることができるということです！

いずれは、例えば消費者に小さなインセンティブを提供するなどして、BYO ボトル運動を支援してもらえるよう、より多くの食品・飲料店に働きかけたいと思っています。同時に、友だちの影響というのも変化を引き起こす強力な手段の一つだと思っています。一緒に食事をする時にプラスチックストローを断るなど、友だちに手本を示すことで、シンガポールで廃棄されるプラスチックの量を減らすことができると考えています。

プラスチック危機は一晩で作られたものではなく、もちろん一日で解消できるものでもありません。しかし、私たちが消費するプラスチックがどのように累積していくのかを理解することは重要です。例えば、1 日 1 本ストローを使う、または毎朝コーヒーカップを 1 つ消費することで、海にフランスの国土の 3 倍ほどの巨大なゴミの渦を作るほどの膨大な量が溜まるのです。同じように、毎日の小さな活動がプラスチック汚染との戦いにおいて大きな違いを生むのです。

このような変化を私は起こしていきたいのです。地球は私たちが搾取していいものではないこと、自然の恵みを当たり前だと思ふことを止めるべきであること、そして、私たちにはこの戦いに勝つ力があるということを知ってほしいのです。これはもうできるかどうかの問題ではなく、やらなくてはならないことなのです。